

## 釜山濟生医院

金川 英雄

東京武蔵野病院

日本が最初に海外につくった病院は、釜山濟生医院だということは知られていない。江戸時代を通じて釜山には対馬藩の草梁倭館があった。倭館とは日本人居留地のことを指す。1678年、現在の釜山龍頭山公園一帯に設定され、十萬坪もの面積があったという。いわば長崎の出島のような場所である。日本は鎖国をしていたが、さまざまなルートで海外と貿易などをしてきた。出島、琉球、蝦夷、朝鮮通信使とならぶ第五のルートである。釜山濟生医院の直接のきっかけは1876年、ソウルへ派遣された宮本小一外務大丞が釜山に滞在した際に病院設立の必要性を感じたからだ。病氣やけがに悩まされる人を多く見たことが、当時の記録にある。

朝鮮半島の海の玄関口、釜山の歴史について述べる。地図でみると対馬は日本より韓国の方が近く、釜山からは対馬が良く見える。対馬藩が草梁倭館を経営していた関係で、対馬藩士はかなりの頻度で海峽を渡った。明治時代早期に、対馬藩の宗家の典医であった半井澁四郎なかい たん しろうという日本人医師がいて、釜山で医師として働いたことが分かっている。彼の長男は半井桃水で樋口一葉の師であり思慕の対象だったことで有名である。

1872年から釜山では対馬藩の御雇医者、高田英策が治療を施していたが、増えつつあった日本人には彼だけでは不十分だった。漢方医半井澁四郎は、明治維新になると解雇された。高田は西洋近代教育を受けた点で半井と違い、継続して釜山で働いた。つまり高田英策は海外で医療をした最初の日本人医師である。高田に釜山行きの旅費を払うようにとの、1878年(明治11年)2月6日の書類がある。花房義質はなぶさよしは明治の外交官で、1877年、駐李氏朝鮮代理行使に任命された。両国の間で重要な役目をした。この時はまだソウルに常設の公使館がなかったため、釜山からソウルに派遣されたが、その時に高田英策が同行している書類も現存する。

風土病を含む様々な疾病の流行を懸念するなど、釜山に居住する自国民を保護するために、医療施設の設置が不可欠なものであった。同時に江戸時代の対馬藩宗氏を仲介とした外交から、明治政府が対馬藩から外交権を取り上げ、朝鮮と直接交渉に乗り出した。貿易でも対馬藩は江戸時代、巨額の利益を得ていた。明治政府は貿易にも直接乗り出し、自分たちの利益にしようとした。1872年(明治5年)9月、日本政府はそれまで対馬藩が管理していた草梁倭館を日本公館と改名し外務省が直接管理するようになった。日本政府からすると幕藩体制の崩壊、中央集権化への過程で当然のことだった。日本人の活動範囲が広がると、それにつれて医療も必要となる。病院建設の要因として、日本人への治療、伝染病対策などがある。特に釜山は日本への玄関口にあたる場所で、ここで感染症を食い止めたかった。

日本政府は軍医の矢野義徹を1876年に釜山に送った記録がある。明治時代海外の官立病院は平時、軍医が派遣され民間の人々の治療も担った。開院の日付には、1876、7年の間のいくつかの説がある。これは軍医の到着と施設の拡充が同時進行で行われたからのようだ。最終的には1877年2月11日、現住所：釜山広域市東光洞二街九に官立濟生医院を開いて、海軍軍医官矢野義徹を院長に任命した。場所は「一代官屋」という屋号の家だった。特筆すべきことは毎月15日には無料で種痘を接種したことだ。濟生医院は、釜山共立病院、釜山居留民団立病院、釜山府立病院と名前を変えながら発展していった。